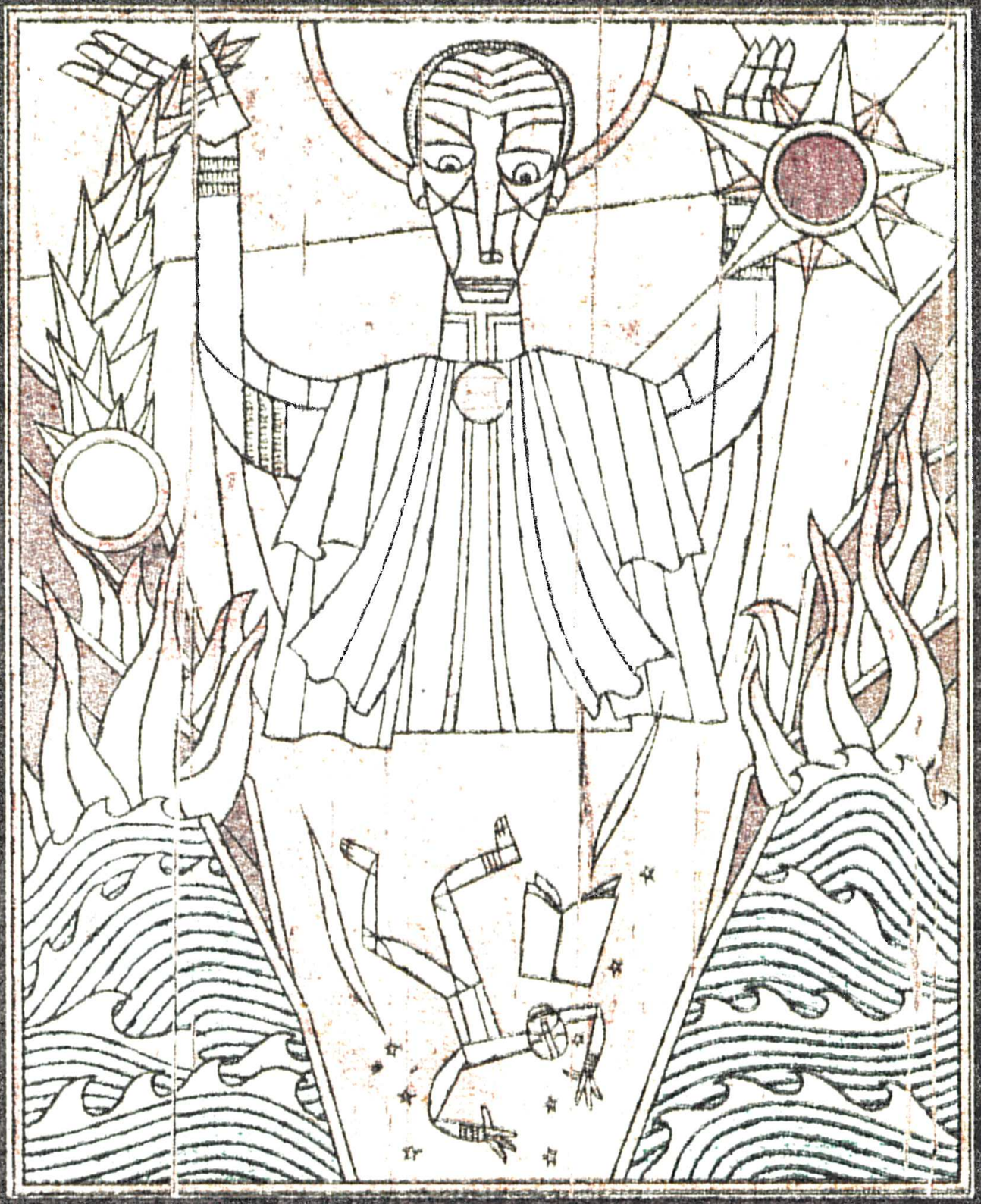


親愛なる友へ。私の名はゲーン。

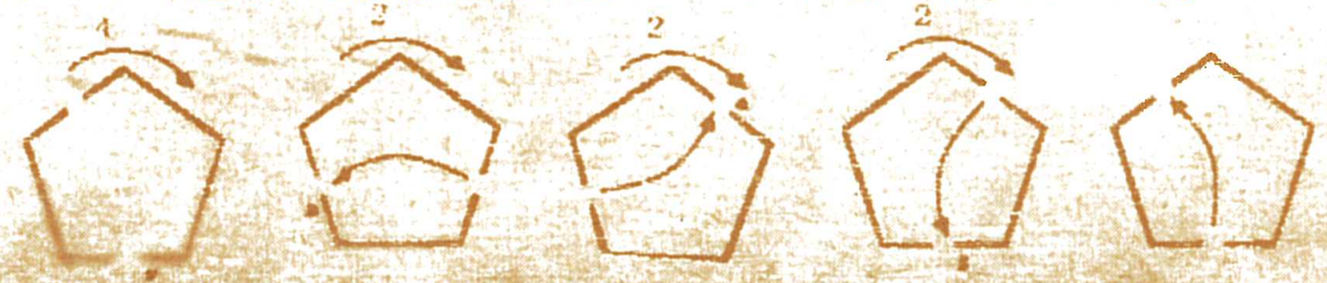
恐らく、すでに私のことについてなんらかの情報を得ているとは思うが、この私こそが第五時代の創造主であり正当な指導者だ。まずは、この手紙を開いた君に感謝したい。

このリヴンとも呼ばれる、第五時代の各所を見てもらえば分かるとは思うのだが、この時代は今、壊滅の危機に瀕している。実のところ、この状況から住民たちを救うのは簡単なことなのだが、そのためには私がこの第五時代から、息子アトラスのいる時代へと接続する必要があるのだ。君がこの時代から抜け出すことのできる接続書を手にしているのなら、真っ先に私のオフィスへ届けてほしい。この滅びかけた時代の住人を救うのは、それしか方法がない。

私は我々に刃向かう反逆者どもの行為を封じるため、この時代にあらゆる仕掛けを施したが、ひょっとしたら、その仕掛けが逆に君を苦しめるかもしれない。そのようなことがないよう、この手紙に、それらを切り抜ける簡単なコツを書き留めておいた。

さて、身近な場所から説明を始めることにしよう。君は私の歴史絵のある部屋に、もう足を運んだであろうか？この正五角形の部屋は、ボタンを押すことによって回転し、正面入口より先にある洞穴を上手く使えば、回転させることにより別の場所へと行けるようになる。その洞穴に入るには、鍵を壊す必要はないだろう。

それより気をつけねばならないのは、部屋を回転させるボタンであろ。全部で4ヶ所あるのだが、それらは暗くて見えにくい位置にあるので注意して欲しい。これは、エレベーターなどを動かす他のボタンにもいえることなので、それらしい場所に立ったときは、見落とさないように調べてみることを勧める。最後に一言付け加えておくと、部屋を一度でも回転させれば、必ず入口は変化する。根気よく調べれば必ず道は開けるだろう。



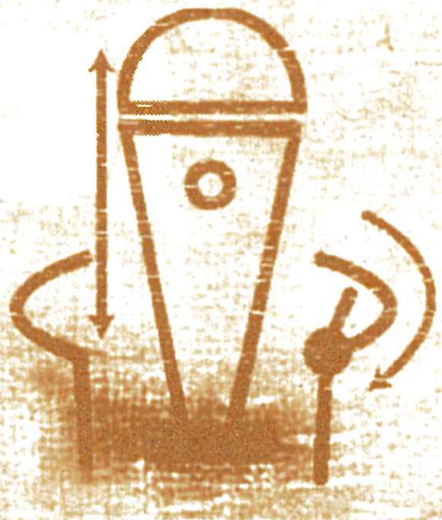
これが最期の手紙だ。ここまで読まなければならないとは、君はかなり手のかかる人種のようだ。

おおよそのことを書き終えたところで、私から君へ、一つの謎解きを託したいと思う。私がこの第五時代を創造したということは、前文にも記したことではあるが、その私でさえ、それがいったいなんのために存在するのか、理解できないものがあるのだ。

君は、思いもよらない場所に、おかしな木の玉が埋め込まれているのを見つけたことがあるだろうか。目のような彫り物が特徴的なこの玉は、我々の方でもいくつかの数を確認している。玉に触れた時に発せられるその奇妙な音や背面の印が何の意味を持つのか、今のところ解明されていないのだ。

もし、君さえよければ、これらの玉の秘密を、それとなく探ってみて欲しい。玉の近くに剣が突き刺されているところを見ると、粗暴なブラックモエティが何らかの形でかかわっている可能性があるので、奴等とは深く関わらないよう慎重に行動してくれたまえ。また、参考までに書いておくが、玉のサンプルを採取した入り江付近は湖底の部屋にある監視スコープで見ることができる。

では、気を付けて旅をしてくれたまえ。成功を祈っている。



ゲーン

私の戯れ言にここまで付き合ってくれる友は、そんなにはいないのだが、ますます君のことが気に入ったよ。

その友人に対し、第五時代の文化や地理について語ることにしよう。君が外の世界からやってきたということは知っている。これから記述する内容は、君にとって、少なからず役に立つはずだ。

君にはなじみ薄いかもしれないが、私はこの時代をドニの文明を基礎にして創造し、第五時代と名づけた。我々の暮らす家や、学校、着るものや履くものに至るまでドニ文明を反映させている。偉大なドニ文明は、まさしくこの瞬間、君の目の前に広がっているのだ。

もちろん[illegible]あるすべての島についても同じことが言える。各島は、ドニの色彩シンボル学を反映させた色をそれぞれ持っている。また、当然ドニの文字も存在し、我々は普段この文字を使用している。文字や言葉を覚える必要はないと思うが、数字くらいは、読めるようになっておいた方が、なにかと有利に行動できるだろう。

地理についての説明をしよう。この第五時代には現在[illegible]つ島が存在している。昔は一つの巨大な陸地であったのだが、今はその面影もない。全てが沈んでしまう前に、一刻も早く接続書を入手し、手を打たなければならない。

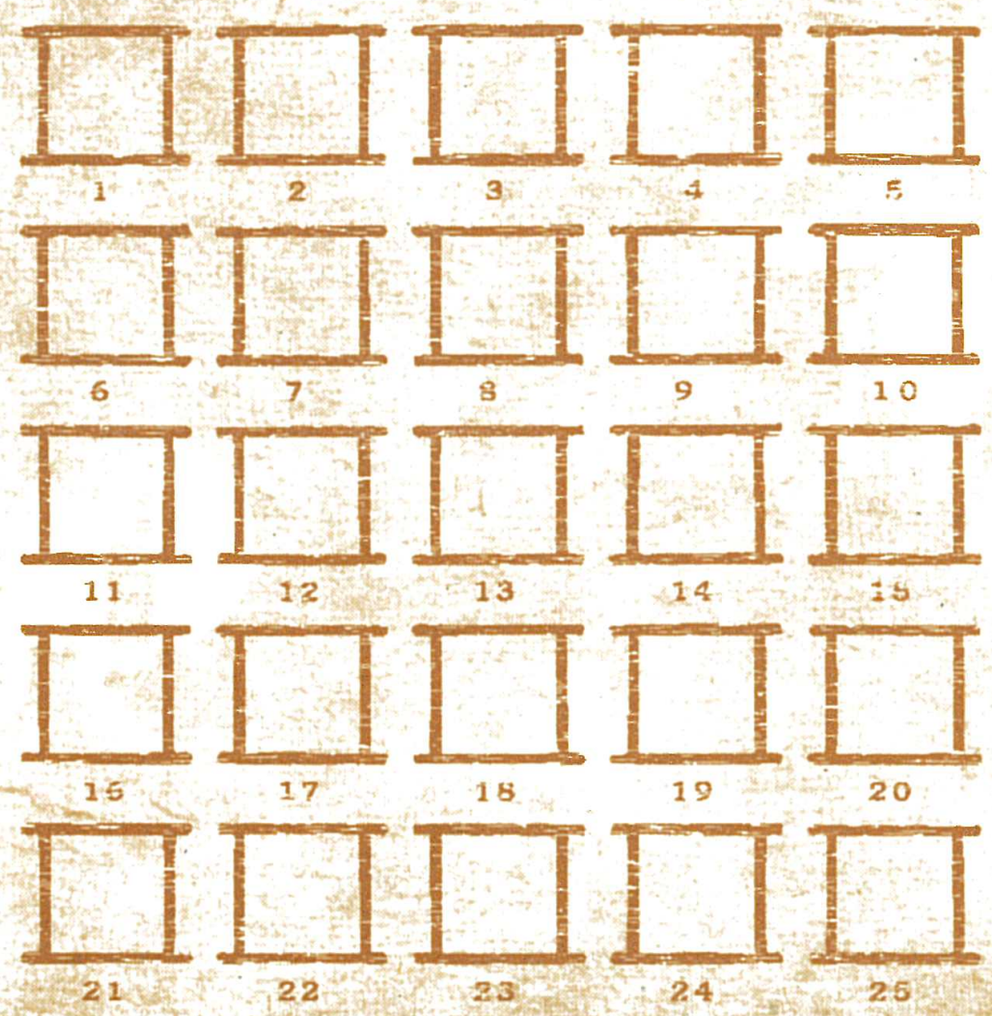
君が最初に降り立った島については、もう周知のことであろうから、ここで書くことはしないが、島の間をつなぐ乗り物を使用すると、森の残る、この時代でもっとも広い島に行くことができる。ここには、私に従う住民たちが暮らしている。彼らは、外部のものに取り分け臆病なので、なにかと無礼な振る舞いを取ることがあるかもしれないが、悪意はないのだ。許してやってほしい。これもブラックモエティたちから身を守るために習慣づけられた、悲しい習性なのだ。

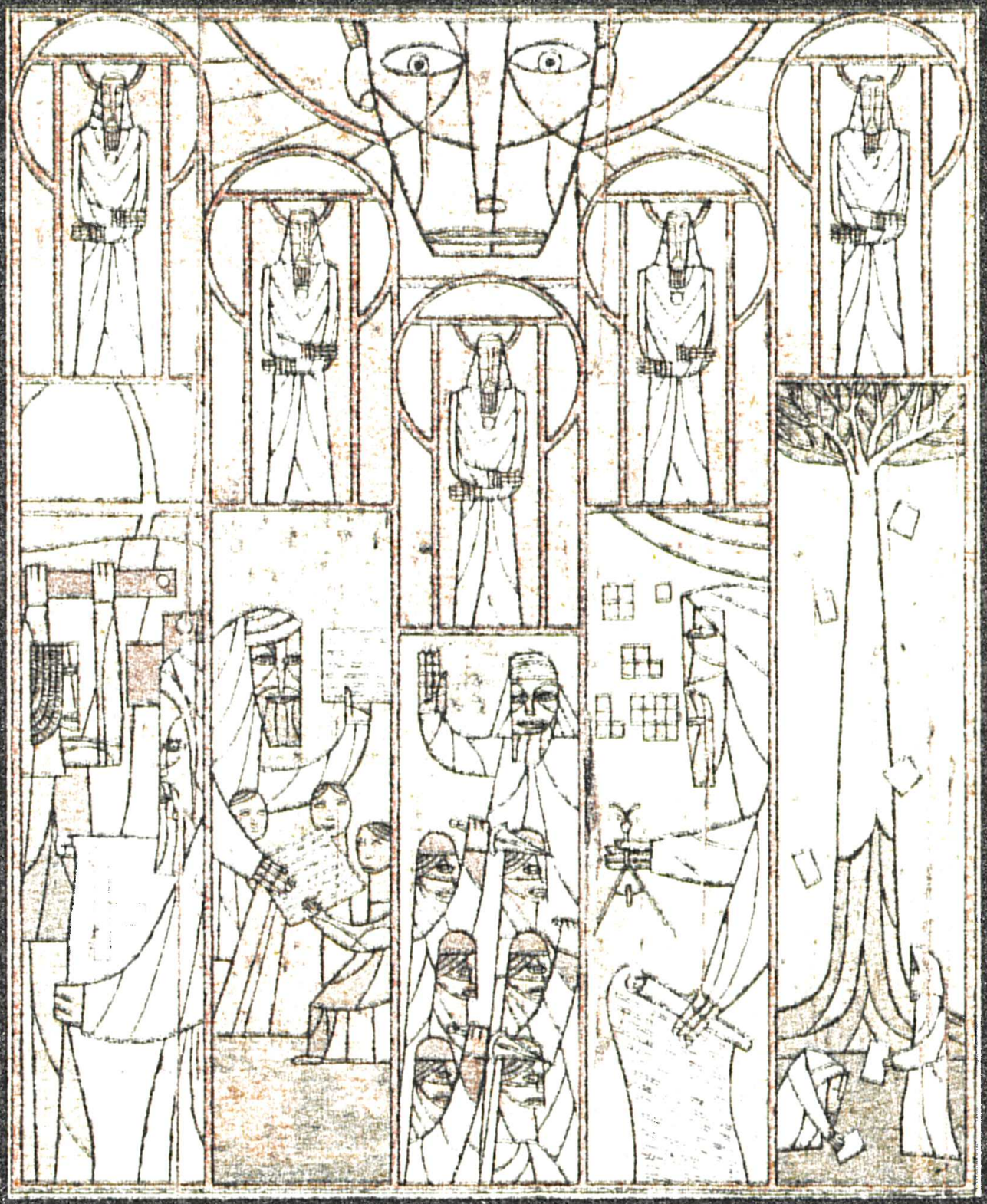
クレーター状になり真ん中に湖がある島もある。そこには私の実験室と工場がある。

巨大な水の仕掛を設置してある島は、とても美しい場所である。もし、訪れる機会があるのなら、エレベーターを登ってその施設を眺めてみるのも面白いかもしれない。ここからの眺めで、それぞれの島の形を把握できることだろう。また、各島を立体であらわす装置もあるので、役立ててもらえば幸いである。

残る一つの小さな島については、特筆するようなものはないので説明は割愛する。君がわざわざこの島へ足を運ぶ必要はないだろう。

以上、要約しまとめ書いておいた。君にもドニの文化に触れて欲しい。なお、参考までにドニの数字が書き込める枠を用意した。役立ててほしい。





この手紙を読み進めてくれている友へ敬意を表したい。どうやら私のことを信頼してくれているようだ。

実は、私の作った仕掛けは、理屈さえ知っていれば簡単に操作ができる。このことは、この第五時代にあるほとんどの仕掛けに言えることである。その仕掛けを動かす多くの場合は、最初に動力を供給するレバーを回しておかねばならない。これは、私の実験室にある小さな機械ひとつをとっても同じことであり、その換気扇についても、動作させたり停止させるレバーがあるのだ。

動作しているか否かの確認は、そのほとんどが、レバーの上にある蒸気の開放口を見てもらえれば分かることである。パイプから蒸気が漏れているときは、仕掛けに動力が向かわない構造となっている。動力が伝達されているかどうかは、その蒸気噴射の音で判断できるだろう。しかし、中には複数の場所に動力を供給するレバーも存在する。その型のものは、レバーをひねった方向のみへ動力を供給するように設計してあるで、うまく切り替えて装置を利用してほしい。

また、レバーの中には、動力でなく扉を操作するものもあり、上に押し上げれば、扉は持ち上げられ開かれる。これらについては、発見したら素直に押し上げておくのが良策である。たとえ目に見えなくとも、どこかの扉が開かれるのだ。逆に、触れるだけで開くような扉は疑った方がよい。何の変哲もなさそうな扉には、かえって注意が必要だ。

このような仕掛けに労力を注ぐことになったのは、すべてはブラックモエティと呼ばれる反逆者集団のためだ。奴等は、キャサリンという女性を神として崇め、彼女がこの世界を救うという妄想に取り付かれている。それだけであるならば、まだ可愛いものだが、私の国民から盗みを働いたり、脅しをかけたりすることを主な活動としている奴等は、この私の存在さえも脅かしているのだ。この世界を創造した私をだ！

我々がブラックモエティと接触するには、命をも危険にさらさなければならない。これは外の世界からやってきた君にも当てはまることであろう。君が自ら、ブラックモエティと接触するような危険な真似は控えて欲しい。我々の未来は、全て君にかかっているのだ。